

令和 7（2025）年度 第 1 回東近江市環境審議会 議事録

◆開催日時 令和 7（2025）年 7 月 30 日（水） 午後 2 時～ 4 時

◆開催場所 東近江市役所 313・314 会議室

◆東近江市環境審議会委員（敬称略、順不同）

出席者 13 名

仁連 孝昭、山崎 亨、荒木 希和子、藤岡 康弘、上田 宜和、金 再奎、山口 美知子、
植田 すゑ子、綾 康典、熊倉 弘富美、水野 扶美、三輪 昌美、山北 文子

欠席者 2 名

向 春美、足立 進

◆事務局

環境部	部長 仲谷 隆彦、理事 五十子 又一、理事 山本 享志
森と水政策課	課長 小西 茂喜、課長補佐 松居 正人、係長 久保田 雅士、 主査 竹中 壽人
生活環境課	課長 田中 和則、課長補佐 西村 藤生、係長 村井 明生
資源再生推進課	課長 杉島 和仁、課長補佐 勝田 一吉

◆次第

1 開会

2 議事

(1) 環境調査について

(2) 第 3 次東近江市環境基本計画策定について

・基本的事項～基本施策（修正版）

・重点プロジェクト（案）

3 報告事項

(1) 年次スケジュールについて

(2) 生物多様性地域戦略について

4 情報提供

琵琶湖固有の新種としてビワマスに新たな学名

5 閉会

【資料】

次第、委員名簿、環境審議会年次スケジュール、第 3 次東近江市環境基本計画の体系図（案）

資料 1：環境調査まとめ

資料 2：基本的事項～基本施策（修正版）

資料 3：重点プロジェクト（案）

資料 4：体系図（修正版）

資料５：年次スケジュール

資料６：生物多様性地域戦略

資料７：ビワマスに新たな学名

【議事】

１ 開会

仁連会長 開会あいさつ

２ 議事

(1)環境調査について（資料１）

事務局より、環境調査について説明

■環境調査まとめについて

（委員意見）

- ・資料１の２ページに「耕作放棄地や空き家は住宅課や農業水産課が対応している」と書かれているが、実際に荒れている土地というのは、山間部など高齢者の多い地域が中心なのか。

（事務局）

- ・雑木が繁茂しているような放棄地について、確かに山間部で高齢の方が多い地域ということよりも、市街地でも空き家になって更地となり、所有者・相続人が市外や県外にいるため管理されていないケースも存在する。ついては、放棄地の所在は市内全域に広がっており、一概に山間地だけの問題ではなく、市街地の方が、近隣住民からの生活被害の苦情が多いという状況もある。市としては状況に応じて対応している状況である。

（委員意見）

- ・「対応している」と書かれているが、私の地域では何年も空き家や耕作放棄された田んぼが放置されたままである。地主とも連絡が取れず、野生動物が住み着いて環境が良くない。こうした問題に対し、例えば「何年以内に対応する」といった明確なルールはないのか。

（事務局）

- ・法的に「何年以内に対応しなければならない」といった強制力を市が持つことは難しい状況である。空き地については市の条例で「適切な管理」を求めている、空き家には空き家対策特別措置法、農地については農地法の規定がある。ただし、いずれも個人財産で所有者の権利が強く保護されており、市が強制的に指導・改善できるケースは限られている。そのため、市としては「苦情が出ていますので対応をお願いします」といったお願いベースでの対応が基本となる。５年などの期限を切って指導することができれば理想的であるが、現実には繰り返し指導を続けるという形で取り組んでいる。

(2)第3次東近江市環境基本計画策定について（資料2、資料3、資料4）

基本的事項～基本施策（修正版）、重点プロジェクト（案）について説明

■環境基本計画について

（委員意見）

- ・「省エネの推進」についてエネファームのようなコージェネレーターに対して奨励金については、エネファームは天然ガスであり、化石燃料を使用するため、再生可能エネルギーとは言えず、推奨すべきではないと考える。確かにコージェネではありますが、発電量も少なく、効果は限定的です。市としてはエネファームのような機器ではなく、太陽光パネルや太陽熱利用など、真に再生可能なエネルギーへの転換を推進すべきである。

■重点プロジェクトについて

（委員意見）

- ・全体の構成について、全9プロジェクトのうち、第8プロジェクト（森里川湖インパクトファンド）は具体的な内容が明確ですが、それ以外はやや抽象的で、重点というより全体的な羅列に見えてしまう。すべての課題を重点化してしまうと、結局どれが優先されるべきかが見えにくくなり、全体の方向性がぼやけてしまう懸念がある。重点プロジェクトとして掲げるのであれば、明確な優先順位と推進性を持たせる必要がある。
- ・「取組指標」の記載について、「重点プロジェクトごとに、市民が進捗を実感できるように取組指標を設定し、市民参加による進捗確認を行っていきます」とあるが、各プロジェクトごとの記載を見ると、最後の部分で「取組を設定します」となっており、整合性が取れていないと感じる。本来であれば、「どういう取組を行うのか」、その上で「どのような姿を目指すのか」という流れが必要であるが、現状ではその肝心な部分が弱く、取組と目標の関係性が不明瞭である。背景やバックグラウンドがあつてこそ、取組の意義や優先性が見えてくるはずである。特に、「生物多様性保全・再生プロジェクト」の取組指標では、「地域の自然や生き物を観察・記録している」「子供が学校で自然観察をしている」といった項目が挙げられているが、それだけで本当に十分なのか疑問である。本文には多くの要素が盛り込まれているにもかかわらず、最後にそれらをどう評価し、どのような姿を目指すのかという視点が弱く感じられた。取組指標には、背景や目標を踏まえた、よりの確で整合的な記述が求められると思う。
- ・各プロジェクトの内容自体は、過去から現在に至るまでの経過が丁寧に整理されていて、しっかりとまとめられているという印象を受けたが、それぞれのプロジェクト同士の関係性やつながりが、もう少し明示されると良いのではないかと感じる。例えば、「100年の森づくりプロジェクト」は森林資源や森林機能に関する取組が中心になっているが、森林は生物多様性の観点から見ても極めて重要な生態系の一部であり、この取組が「生物多様性保全・再生プロジェクト」にも関係しているという位置づけがあつてよいはずである。このように、一つの取組が複数のプロジェクトにまたがって関連していることを、体系的

に関連付けて示すことで、「このプロジェクトを進めることが、他の分野にも波及する」といった効果や意味合いがより分かりやすく伝わると思う。

もう一つは「取組指標」について、文中には、市民がどう実感するかという記述があるが、そもそも市民にその存在や内容を知ってもらうことが大事だと思う。そうすると、「どうやって市民に伝えるか」「どんなアウトプットで共有するか」といった情報発信の方針や方法についても、あらかじめ考えておくべきだと感じた。この文書に必ずしも書き込む必要はないかもしれないが、取組の成果を市民と共有する方法について、しっかりと考えておくことが大切だと思う。

- これまで、渋川で産卵のために遡上するビワマスの保全活動に取り組んできており、以前の環境審議会でも、せっかく多くのビワマスが遡上してくるのだから、地元の小学校で観察してもらうような取組ができないかと提案したが、学校側は非常に多忙で、新たに授業へ取り入れるのは難しいとのことで、実現には至らなかった。残念ではあるが、学校が忙しいという現状も理解している。また、観察会を開いても、参加者はむしろ大阪や京都といった遠方から来られる方が多く、地元の方々はあまり関心を示されないというのが実情である。これは無関心というより、身近すぎて価値が見えにくくなっているのかもしれない。そうした中で、「次世代人材育成プロジェクト」を重点プロジェクトの一つとして位置づけていただいたことは、とても良いことだと思う。ただし、今後の展開方針にある「小・中・高・大学・社会人を対象とした教育プログラムの整備・拡充」に関しては、教育部局との連携が不可欠である。これまでの経験からも、いくら良い教材やプログラムを用意しても、教育現場との調整がなければ実行に移せず、形だけで終わってしまう恐れがある。「次世代人材育成」を掲げるのであれば教育現場との連携を前提とした実効性のある計画として、しっかり進めていただきたい。
- 今回は以前より丁寧に調査されており、表現も穏やかで優しくまとめられていて、とても良い印象を受けた。ただ、率直な疑問なのですが、この計画に書かれていることを、私たち委員がすべて実行するのか。

(仁連会長)

- 委員の皆さんで実行するというのではなく、これは市の行政の指針として定めるもので、行政だけではなく市民や関係団体と協力して実行していくことになる。
- 取組の数が多いように思う。例年これほど多くの施策に取り組んでいるのか。

(事務局)

- 今回の環境基本計画については、前段で「誰がこの計画を担うのか」を明確に定義している。会長が仰ったとおり行政だけでなく、市民一人ひとりや地域の企業、場合によっては流域全体に関係する企業など、多様な主体と連携して進めることを想定している。既に地域の各所で取り組まれている市民活動なども、この計画に反映している。つまり、この計画全体が市としての方向性を示すものであり、「市全体としてこうした取り組みが進んでいく」というイメージを持っていただきたい。

(委員意見)

- ・この1年間でこれをすべて実行するというわけではないのか。

(事務局)

- ・今回の計画は10年間を見据えた長期計画として策定しており、これらの取組は年度ごとに段階的に進めていくことを想定している。

(委員意見)

- ・「森里川湖インパクトファンドプロジェクト」については、東近江三方よし基金が連携先として明記されているが、他の重点プロジェクトに関する「今後の展開方針」を見てみると、実際に活動している団体が思い浮かぶものもあるが、文章中では主語が明確でないものが多く、「〇〇をします」「〇〇を図ります」といった記述が続くだけで、「誰がそれを担うのか」が不明確である。三方よし基金以外については記載がなく、このままだと「すべて市がやるのか」と受け取られかねないのではないかと感じる。現実には、市だけで実施できるものではなく、多様な主体との連携が前提となっているため、「誰と連携して、どのように進めるか」といった記述をもう少し丁寧に加えると、関係者それぞれが「自分たちが関わるべき部分はここだ」と理解しやすくなり、実現可能性も高まると思う。この点に関しては、実は基本施策の「つなぐ」の中の「イ：市民、企業、行政が協働するまちづくり」が非常に重要な意味を持っている。しかし、私が確認した限り、この施策が重点プロジェクトの「関連する主な基本施策」としては、どこにも記載されていない。これは、多くのプロジェクトに共通して関係する視点であり、特に仕組みづくりの観点からは強く意識されるべき施策だと思う。生物多様性に関する指摘にも通じるが、複数のプロジェクトに横断的に関わる重要な施策として、基本施策と重点プロジェクトとの関係性を、もう少し現実に即して明示すると、より良いものになるのではないかと感じる。

(委員意見)

- ・私の家の近くにもビワマスの遡上が見られる場所があり、2～3年前に初めてそれを知った。正直、地元の人でもそのような自然の価値に気づいていないことが多く、関心も薄いと感じる。やはり、どのような課題に対しても、市民一人ひとりが当事者意識を持って取り組むことが重要だと思う。学校の先生に話をしても「忙しいから難しい」といった反応が返ってくることがあり、そうした状況を考えると、地域のことをよく知っている人が出前講座を行うなどして、市民に対して積極的に情報を届けていく必要がある。
東近江市は、自然環境、福祉、環境政策など、さまざまな面で恵まれた“宝の宝庫”のような地域であるが、そうした魅力や価値が市民に十分に伝わっていないと感じる。だからこそ、もっと多様な方法で情報を発信し、広く周知していくことが大切である。そして、市民の意識が高まれば、自然や地域の取組に対する参画も進むのではないかと感じる。
- ・「再生可能エネルギー」に関する部分について、太陽熱の利用についての記載が見当たらない。再生可能エネルギーというのは、地域資源を活用するものとして非常に重要であり、脱炭素、つまりカーボンニュートラルを実現するための鍵となる。

元々、エネルギーの根本的な源は太陽であり、太陽エネルギーの利用は、空間的な広がり
を伴い、生物多様性の保全やネイチャーポジティブの実現、さらには災害リスクの低減と
も密接に関係してくる。ただし、その利用方法にはトレードオフの関係も多く存在する。
例えば、太陽光発電施設をどこに設置するか、小水力発電をどこで実施するかといった立
地の問題は、自然環境との調和や景観とのバランスを取るうえで非常に重要である。

このため、重点プロジェクトの中では「促進区域の設定」という観点、つまり「どこで導
入を進めるか」という議論を始めること自体を明記すべきだと思う。2050 年あるいはそ
れ以降を見据え、どこにどれだけ導入していくのか、その戦略的な議論が今から必要であ
る。現時点で促進区域を設定するところまでは難しいかもしれないが、「議論を始める」
という意思表示を計画に盛り込むべきではないかと考える。

- ・重点プロジェクトが9つもあると、もう少し分かりやすく整理してほしいと感じた。それ
ぞれのプロジェクトを、一言で内容が分かるように言い換えてもらえると、より理解しや
すくなると思う。例えば、1 番目のプロジェクトであれば、「何をするのか」を簡潔に1 行
程度でまとめて提示してもらえると助かる。見出しと説明の横に、「具体的に〇〇をする」
といった短い説明を添えていただくことで、全体像がつかみやすくなると思う。私の場合
はその方が理解しやすいと感じた。

また、学校の先生が「忙しい」と言われることについて、農業委員会の場でも同様の話が
出たことがある。これは私たち大人の側にも反省点があると思う。以前、小学校に行って
意見交換をしたとき、私たち大人の間で意見がまとまっておらず、議論がバラバラになっ
てしまい、子どもたちにも迷惑をかけてしまったことがあった。

それでも毎年 100 人ほどの子どもたちが参加して、田植えや稲刈りなどを体験してくれ
ている。子どもたちは特に稲刈りが大好きで、もっとやりたいとの声も多いが、熱中症対
策でアラームが鳴るため、朝8時20分には活動を終了するときがある。そうした中で「な
んとかしないと」と思ったとき、大人たちがしっかりと話し合いを重ね、先生方とも丁寧
に意見交換することで、少しずつ理解と協力が得られるようになった。

ついでに、「先生が忙しいから仕方ない」と諦めるのではなく、しっかりと対話を重ね、
意見をすり合わせていけば、実現に向けて前進できるのではないかと思う。

3 報告事項

(1) 年次スケジュールについて（資料5）

事務局より、年次スケジュールについて報告

(2) 生物多様性地域戦略について（資料6）

生物多様性地域戦略について報告

■生物多様性地域戦略について

(委員意見)

- ・「生物多様性地域戦略」を策定することになったとのことであるが、環境基本計画に出てくるのは当然として、他の自治体、たとえば滋賀県などの計画をそのまま真似るようなものにはしないでいただきたい。東近江市には、エコツーリズムの推進や「100年の森づくりビジョン」など、独自に取り組んできた実績があります。地域資源を再生・活用しながら、生物多様性を見直していくという方針は他市とは異なる強みである。そういったこれまでの取組の延長線上にある戦略として、きちんと整合性を持たせ、東近江市独自の「生物多様性戦略」を策定していただきたいと強く思う。

4 情報提供

藤岡委員より、以下に関する情報提供がなされた。

琵琶湖固有の新種としてビワマスに新たな学名

■その他意見

<環境大臣賞 受賞の報告>

(委員意見)

- ・昨日、私が勤務している「河辺いきものの森」に中学生の子が来てくれた。その子は、国土交通省が主催する「全日本中学校水の作文コンクール」で環境大臣賞を受賞されたとのことで、その報告に来ていただいた。
- また、同じく東近江市の別の中学生も中央審査会特別賞を受賞されており、お二人とも小さい頃から私たちがよく知っている子どもたちで、河辺の自然とも深く関わってきた子たちである。地域の自然に触れてきた経験をうまく作文にまとめ、全国規模のコンクールで評価されたことは本当に素晴らしいことだと思う。この場をお借りして、皆さんにもぜひ共有したいと思い、お話をさせていただいた。

5 閉会

全議事が終了し、閉会が宣言された。